

はじめに

都市開発等諸種の開発に伴い、先人の遺産であり、大分の歴史を語る文化財の保護・保存との調整は、極めて大切な行政課題となっていますが、特に埋蔵文化財にかかる発掘調査と保存のあり方は、ひとり大分市のみでなく、全国的な問題として種々の議論や方法が展開されています。

大分市では、文化財保護法、並びに大分市文化財保護条例の主旨にのっとり、文化財の保護行政に努めています。360.65平方キロメートルの市域には、現在判明しているだけで310箇所の周知遺跡がありますが、その中で、特に重要と思われる遺跡について概要調査を実施し、将来の開発等との調整をはかるための基礎資料の作成を目的として、植田木ノ上地区の古墳を対象に平成6年度より重要遺跡調査を実施してきたところで、す。

本書は、その報告書であり、本書が文化財保護の理解と関心の深まりへの一助となれば幸いです。

調査にあたりまして、ご協力を賜りました土地所有者、ならびに地元の方々に深く感謝の意を申し上げます。

平成8年3月

大分市教育委員会

教育長 清 瀬 和 弘

例 言

- 1、本書は、大分市木ノ上地区に所在する重要遺跡確認調査事業に伴って平成6年度・7年度におこなった調査報告書である。
- 2、本書に報告する内容は、平成6年度に木ノ上峠横穴墓群・山伏古墳群、平成7年度に浅草神社古墳群の地形測量・遺構の実測・現地踏査をおこなったものである。
- 3、遺構の実測・写真は池邊がおこなった。
- 4、本書で使用了地形測量図は、外部委託により測量をおこなったもので、横穴墓の遺構図ならびに地形の立体図は今回新たに作成したものである。
- 5、本書掲載の地形図は、平面直角座標2系（北緯33° 0′、東経131° 0′）をX・Y座標の基点として位置を表している。
- 6、本書中で使用している地形の立体図は、アイソメトリック法（等角投影法）を用い、縦・横・高さの各辺縮尺率は共に同じで、実測・測量の数値を使用している。なお、作成にあたっては沼上省一氏に多大なるご教示をいただいた。
- 7、調査を実施するにあたっては、土地所有者をはじめ地元の関係諸氏には多大なる協力をいただいた。
- 8、本書の執筆は、駿枝和夫・塔鼻光司・坪根伸也・池邊千太郎が分担してあつた。
- 9、図面作成・遺構の実測にあたっては後藤典幸・塩地潤一・新藤美由紀・安部知美・埜川麻乃の協力を得た。
- 10、本書の編集・構成は池邊が担当した。

目 次

挿 図 目 次

はじめに	第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
I. 遺跡の立地と歴史的環境	第2図 木ノ上地区地形図	4
II. 遺跡の概要	第3図 木ノ上峠横穴墓群・山伏古墳群地形図	5～6
1. 木ノ上峠横穴墓群	第4図 志土地横穴墓群俯瞰図	7
志土地横穴墓群	第5図 木ノ上峠横穴墓群俯瞰図	9
木ノ上峠横穴墓群	第6図 木ノ上峠横穴墓群5号墓実測図	10
土肥横穴墓群	第7図 木ノ上峠横穴墓群6号墓実測図	11
2. 山伏古墳群	第8図 土肥横穴墓群俯瞰図	12
3. 浅草神社古墳群	第9図 山伏古墳群2号墳俯瞰図	14
III. まとめ	第10図 山伏古墳群5号墳俯瞰図	15
	第11図 山伏古墳群6号墳俯瞰図	15
	第12図 浅草神社古墳群地形図	17～18

I. 遺跡の立地と歴史的環境

大分平野を貫流する大野川・大分川の2大河川の流域には小地域にまとまりをみせる古墳群が点在する。大分平野の西部を流れる大分川とその支流の流域には全長50～60mを測る前方後円墳を中心とする大きく3つのグループの一大古墳群の存在が知られている^{註1}。

第1のグループとしては、河口に近い左岸地域に大臣塚古墳を中心とするグループが存在する。現存する古墳は大臣塚古墳のみであるが、大臣塚古墳が鎮座する上野丘陵突端周辺には、かつて数基の円墳が存在していたという。当グループの盟主墳と目される大臣塚古墳は、全長約50mを測る前方後円墳であり、『雄城雑記』によると石棺内から人骨、刀、甲冑の出土が記載されている。記述から組合せ式箱式石棺を主体部にもつと推測されている。墳形は古式の様相を呈しており、およそ5世紀前半代の築造と考えられている。

第2のグループは、大分川の支流である賀来川を望む庄ノ原台地の縁辺に占地し、全長60mを越える規模をもつ蓬来山古墳を中心に小円墳群が散在する。この蓬来山古墳は周濠をもち、近年墳丘上で壘形埴輪が採取されており、これらから4世紀後半の築造年代が推定されている^{註2}。周辺に分布する円墳群には田崎古墳群・万寿山古墳群・深河内古墳群・餅田古墳群などがあり、蓬来山古墳と同じく箱式石棺を主体部にもつことが知られている。

当グループから先述した第1グループを含めた地域の大きな特徴は、6～7世紀において千代丸古墳・丑殿古墳・弘法穴古墳などの本格的な横穴式石室が造営される唯一の地域であるという点にある。他の地域が6世紀以後、埋葬形態を在地性の強い横穴墓群へと引き継ぐのに対し、極めて対照的である。これは7世紀代の古宮古墳の築造にまで継続される傾向であり、これらのことから、当地域にいわゆる大分国造の拠点が存在したと推測させる根拠となっている^{註3}。

第3のグループは、大分川とその支流である七瀬川に挟まれた木ノ上台地に展開する御陵古墳を中心とする古墳群である^{註4}。大分平野の奥部に位置する当古墳群は、5～6世紀を中心に多彩な古墳が数多く築造される地域として注目される。

その中で全長62mと際だった規模を誇る御陵古墳は5世紀前半～中頃の築造と考えられ、箱式石棺を主体部にもち、二段築成の墳丘には円筒埴輪が使用されていた。近年、御陵古墳を臨む七瀬川流域の平野部に位置する植田市遺跡^{註5}において、当該時期の集落跡の一部が調査されており、当古墳の被葬者、ならびに造営者との関連を考える上で重要である。

この地域の古墳群は、第1・第2グループにみるような本格的な横穴式石室を有するような古墳築造への展開はみられないものの、種々のバラエティーに富む墳形、埋葬形態の変遷を通観することができる点で興味深い。

調査事例の僅少な現段階においては、古墳造営の開始時期を明示することはできないが、丘陵狭小部に点在する低墳丘墓は、市内松岡に所在する小牧山古墳群^{註6}の様相に類似しており、近接した所産時期が想定される。したがって、少なくとも4世紀後半段階から末頃には古墳群の形成が開始されたものと考えられる。

5世紀に至り、先述の御陵古墳が築造され、当古墳群はさらなる活況を呈するようになる。主体部に凝灰岩製の切り石を使用した組合せ式の箱式石棺を有する下ヶ迫古墳^{註7}、同じく凝灰岩製の削り貫き式の冢形石棺を有する世利門古墳^{註8}など、埋葬主体の形態を時勢の変化に合わせて推移させながら、確実に連続する様を看取することができる。また、世利門古墳については、主体部内で確認された人骨の腕に南海産のイモガイ製の貝輪が装着されており、当時の広範な交易ルートの一端をかいまみることができよう。

ところで、この地域には以上の高塚古墳とともに、多彩な横穴墓群が分布することでも知られている。



- | | | | | |
|-------------|-----------|-------------|-----------|------------|
| 1. 木ノ上埴横穴墓群 | 2. 山伏古墳群 | 3. 浅草神社古墳群 | 4. 御陵古墳 | 5. 木ノ上古道石棺 |
| 6. 穂田市遺跡 | 7. 大曾横穴墓群 | 8. 漆間横穴墓群 | 9. 虎御前古墳 | 10. 高来山横穴墓 |
| 11. 世利門古墳 | 12. 下迫古墳 | 13. 小野鶴横穴墓群 | 14. 千代丸古墳 | 15. 餅田古墳群 |
| 16. 餅田横穴墓群 | 17. 蓬来山古墳 | 18. 田岡古墳群 | 19. 丑殿古墳 | 20. 万寿山古墳群 |
| 21. 深河内古墳 | 22. 古宮古墳 | 23. 弘法穴古墳 | 24. 大臣塚古墳 | |

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

その中で、最古式に位置づけられているのが高来山横穴墓^{4E9}である。この横穴墓は唯一群を成さないという点で非常に特徴的である。形態的にも玄室奥壁に突起を有するなど後続する横穴墓群とは一線を画する様相を呈している。出土遺物には鉄鉾、鉄鏃などがあり、その諸相からおおよそ5世紀末前後の築造年代が考えられている。6世紀以降に爆発的に増加する横穴墓群の先駆的な事象として極めて重要な事例といえよう。

高来山横穴墓の立地する丘陵の北側斜面に開析する小谷に所在する大曾横穴墓群は6世紀代に造墓が開始されたと考えられる横穴墓群である。ほぼ群中央に占地する横穴墓は羨門部分に赤色の彩色が施された装飾横穴墓であり、市内では唯一の例として注目されよう。

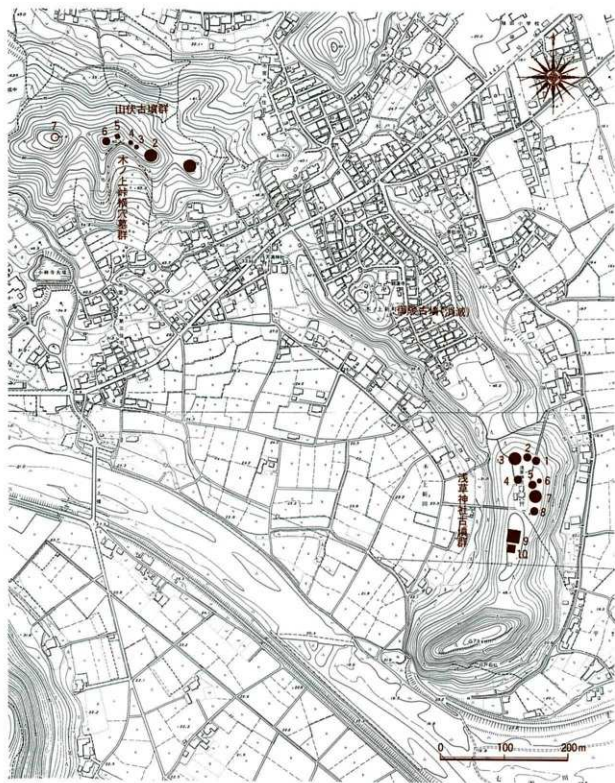
また、この丘陵の北辺部には小野鶴横穴墓群^{4E10}が所在し、現状で二十数基を確認することができる。なかでも、ほぼ中央に位置する横穴墓は特異な構造を示し、4基の横穴墓がひとつの前室を共有し順次造墓されている。

以上のように、木ノ上峠を中心とする古墳群は、その形態・内容が多彩であり、通時的に変遷を把握できるなど、古墳群としての学術的価値は高い。

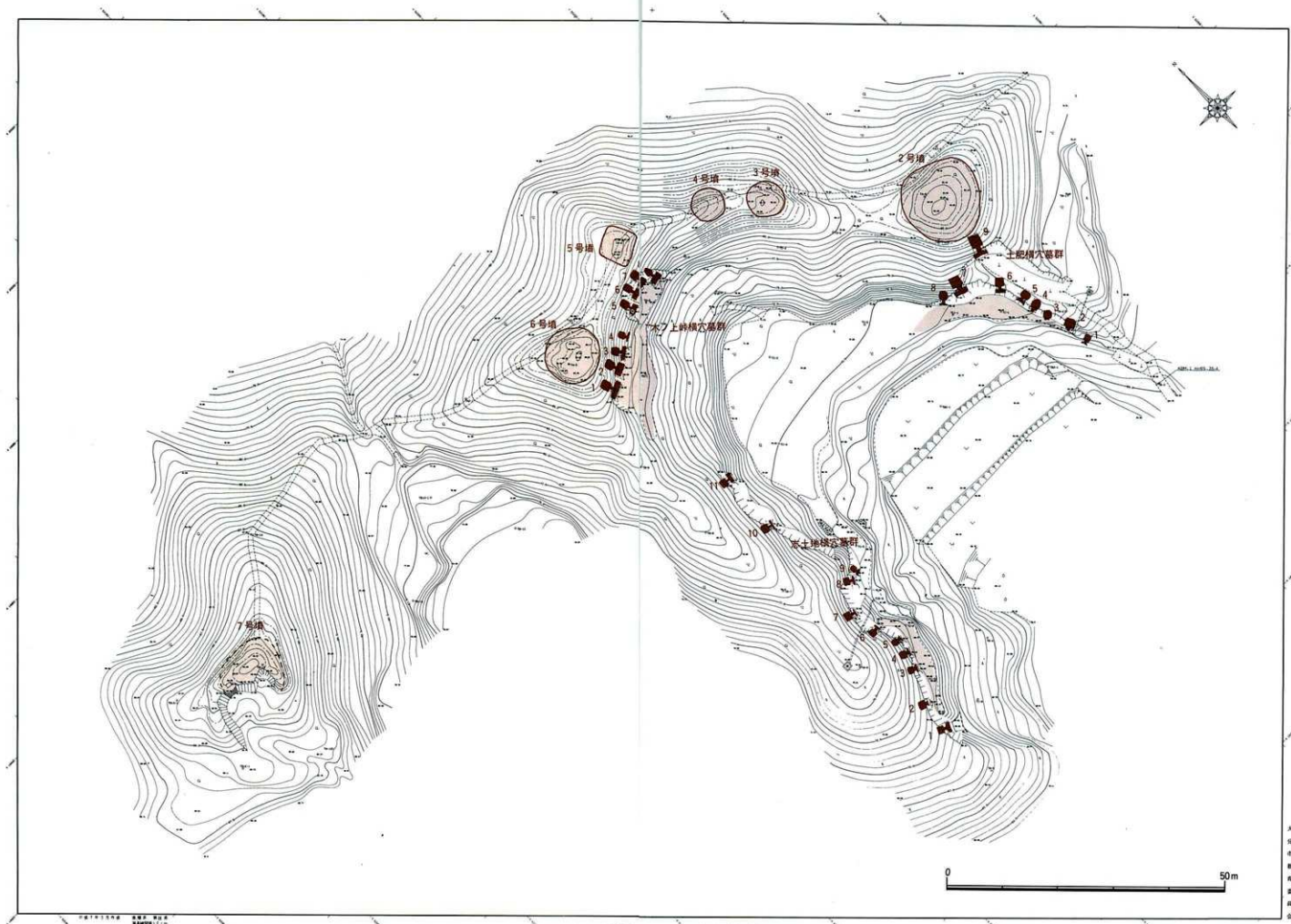
今回調査対象としたエリアは、これらの古墳群の中でも本格的な調査事例が少なかった南側の丘陵に展開する部分に相当する。そういった意味でもこれまでの認識を越えた興味深い事実を内包している可能性を有している地域として注目されてきたところでもある。

註

- 1 渋谷忠章 「大分地方の古墳」『えとのす』 29 新日本教育図書 昭和60年12月
- 2 田中祐介 「東九州における古墳時代首長系譜の変遷と面期（上）一埴輪と墳丘形態からみた大分の首長墳の編年一」『おおいた考古』 第7号 大分県考古学会 1995年
- 3 最近、大分市羽屋地区に所在する羽屋井戸遺跡において、7世紀後半段階の建物群が検出されており、大分国造等との関連が注目されている。大分市教育委員会調査。
- 4 小田富士雄編 「昭和43年度緊急発掘調査概要一御陵古墳とその周辺一」
大分県教育委員会 昭和44年
- 5 渋谷忠章・吉田寛 「埴田市遺跡」Ⅰ 大分県教育委員会 昭和63年3月
渋谷忠章・吉田寛 「埴田市遺跡」Ⅱ 大分県教育委員会 平成元年3月
渋谷忠章・吉田寛 「埴田市遺跡」Ⅲ 大分県教育委員会 平成2年3月
吉田寛 「埴田市遺跡」Ⅳ 大分県教育委員会 平成3年3月
- 6 池邊千太郎 「大分市松岡所在の小牧山古墳群について」『おおいた考古』 第7集 1995年
- 7 大分市史編纂委員会 「大分市史」 上巻 大分市 昭和62年3月
- 8 賀川光夫 「五道輪以上副葬の例一大分県大分村大字木上字世利門古墳一」
『考古学雑誌』 第44巻-1 日本考古学会 昭和33年10月
- 9 杉崎重臣 「木ノ上・高来山の横穴古墳」『大分県地方史』 第32・33号
大分県地方史研究会 昭和39年1月
- 10 池邊千太郎 「大分県小野鶴横穴墓」『立正考古』 第29号 立正大学考古学研究会 平成元年



第2図 木ノ上地区地形図



第3図 木ノ上峠横穴墓群・山伏古墳群地形図

Ⅱ．遺跡の概要

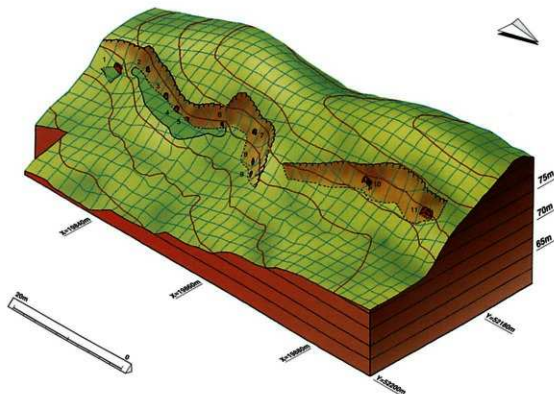
1. 木ノ上峠横穴墓群

木ノ上峠横穴墓群は木ノ上に連なる舌状台地に位置し、このうちの一つの谷間を囲むように3支群28基の横穴墓が分布している。横穴墓の群構成は、分布状況から、西側斜面を志土地横穴墓群（11基）、南側斜面を木ノ上峠横穴墓群（8基）、東側斜面を土肥横穴墓群（9基）の3支群からなる。3支群のそれぞれの横穴墓の内部構造や分布の立地状況から比較すると寄棟形天井やコの字形屍床を持つ木ノ上峠横穴墓群が最初に造営が開始され、次にアーチ形や平天井を有する土肥横穴墓群が形成され、最後にドーム形天井が多く占める志土地横穴墓群が順次造営されていったものと考えられる。

【志土地横穴墓群】

志土地横穴墓群は標高65～75m付近に分布し、11基を数える。1号墓は、一番南側に単独で位置し、内部構造も一際大きい。2号墓～6号墓は、前面にテラスを共有してグループを形成し、7号墓がそのやや上部に構築している。8・9号墓は、2基でグループを形成している。そして、10号墓・11号墓が最も高い位置に造られている。玄室内部の平面形態は、隅丸方形が多く、方形を呈するものは少ない。天井形は、隅丸方形の場合はドーム形天井を成し、方形にはアーチ形天井を呈している。なお、玄室内部には、屍床などの付属施設は見あたらなかった。

大分市内の横穴墓の状況からドーム形天井のものは7世紀前半代に多く、造営の主体はこの時期に相当されよう。



第4図 志土地横穴墓群俯瞰図

【木ノ上峠横穴墓群】

木ノ上峠横穴墓群は群中で最も高い標高80m付近に8基の横穴墓が分布している。群は前庭部の共有する状況から1～4号墓と5～8号墓がそれぞれ同じグループを形成している。いずれもすでに開口しており、中でも1・2・3・4号墓はかなりの土砂が流れ込み内部構造は不明である。羨門の構えを見る限り他の横穴墓群と比較して大きく造りが丁寧である。一方、5～8号墓の中では、注目すべきものとして5号墓と7号墓に、横穴墓の羨門入口を塞ぐ石蓋が残されていた。両方の石蓋は、横穴墓の掘削をおこなった凝灰岩を加工した一枚石であり、形態も同じものである。5号墓の石蓋は、羨門の前の前庭部の左側に伏せた状態で残されている。この石蓋が床面からやや浮いた状態にあることから、被葬者の埋葬時からやや時間がたってから開口され、置かれたものと考えられる。大きさは、長さ85cm、幅65cm、厚さ18cmあり、表側の中央部には長さ56cm、幅24cm、高さ7cmの短冊形の浮き彫りの陽刻が施されている。一方、7号墓の石蓋は、現在羨門に閉塞した状態でみられるが、当初の状態のまま維持していない。このような石蓋は、九州の横穴式石室の閉塞石に数例見られる他、6世紀後半以降に出雲地方で造られた石棺式石室の閉塞石に4例見られるようである。なお、横穴墓にこのような石蓋は、周辺地域では知られていない。

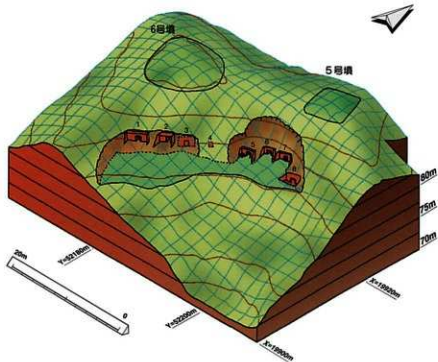
5号墓は、玄室の平面形が方形を呈し、縦軸2.08m、横軸1.78mである。床面には、コの字状に細い溝で区画された屍床が見られた。床面は全体にわたってフラットになっており、段を有するような屍床は見あたらない。さらに左右の壁際と中央にも細い溝が走り、排水溝の役目をもっていると思われる。天井は、高さ0.94mのアーチ形であるが、玄門側の隅から中央にかけて寄棟状にほぞが施されている。しかし、奥壁側にはこのほぞが見られず、天井が丸味を帯びていることから寄棟形天井とはいえない。

6号墓は、玄室の平面形が方形を呈し、縦軸2.3m、横軸1.86mである。床面には、奥壁に一段高い屍床と左右に区分されたコの字状配置の屍床が見られた。天井は、高さ1.42mの寄棟形天井を呈しており、天井と四壁の境には軒が施されていた。

7号墓は、玄室の平面形が隅丸逆台形を呈し、縦軸1.94m、横軸2.04mである。内部には、コの字状に区画された屍床が見られる。天井は、高さ0.97mのアーチ形であり、5号墓と類似する。

8号墓は、5・6・7号墓より一段下がった位置に掘削をおこなっている。玄室の平面形は、奥壁に沿って狭くなる妻入りの楕円形を呈し、縦軸2.28m、横軸1.02mである。床面には、屍床など施設は見あたらない。天井は、高さ0.80mのアーチ形である。

以上、5～8号墓については、横穴墓の開口方向や横穴墓の間隔から一つの単位群を形成しているものと考えられる。ただ、内部構造の違いや前庭部の高さの違いから明らかに時期差が認められる。大分地域の横穴墓の形態変遷の様相を考慮しながら造営の順番を試みれば、最初に寄棟形天井を有し、屍床などの造りが丁寧である6号墓が造られ、次にアーチ形天井を有する5・6号墓が造られ、最後に玄室構造が退化した8号墓が5・6・7号墓のテラスより一段下がって掘削されたものであろう。なお、時期については、大分市内において寄棟形天井が6世紀中頃には出現することやコの字形屍床が6世紀後半に多く見られることから、6号墓はこの時期に造られたと考えられる。玄室構造が崩れてくる8号墓は、7世紀前半代と考えられる。したがって6世紀中頃以降から7世紀の前半にかけての造営の時期幅を想定することができる。



第5図 木ノ上峠横穴墓群俯瞰図



5号墓 羨門部



6号墓 羨門部



6号墓 玄室内部



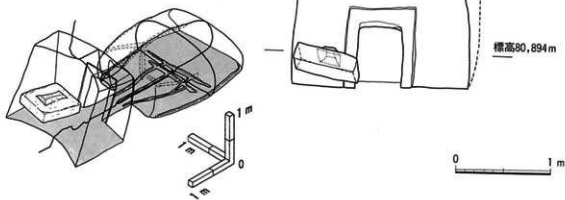
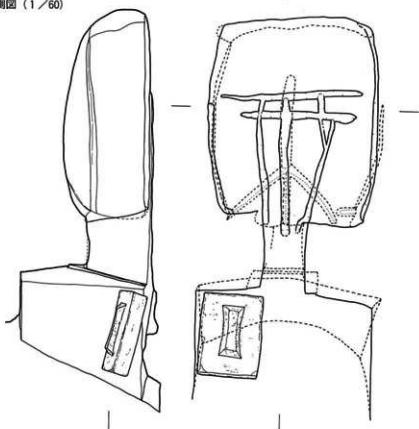
5号墓 玄室内部



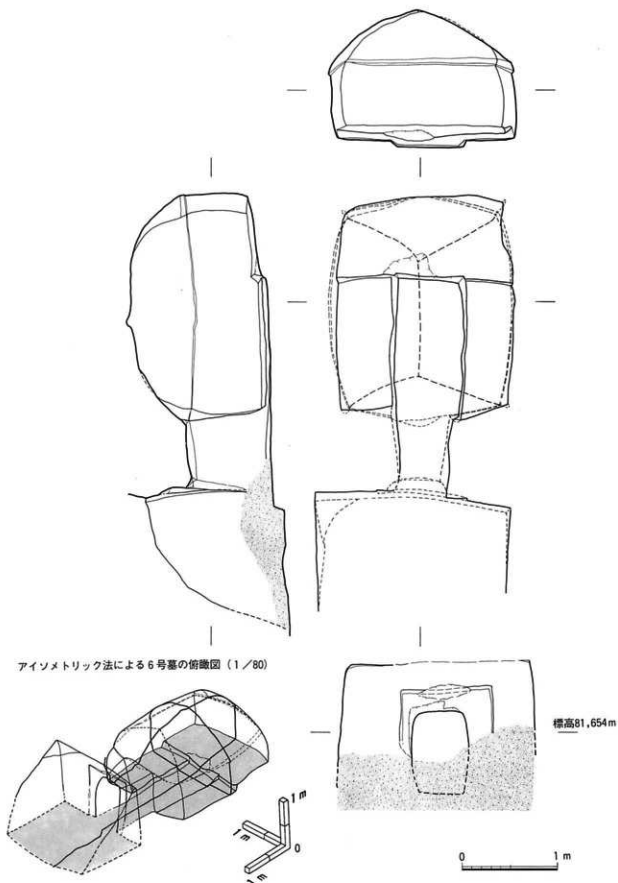
7号墓 羨門部



7号墓 閉塞石



第6图 木ノ上峠横穴墓群5号墓实测图



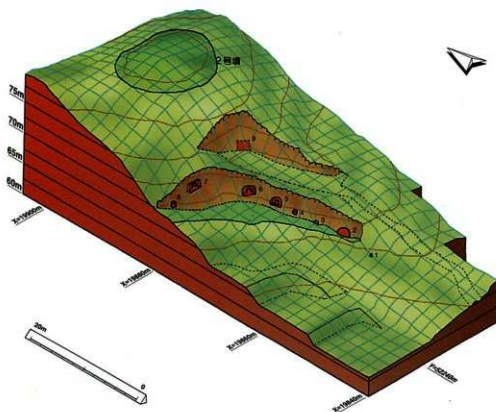
第7図 木ノ上峠横穴墓群6号墓実測図

【土肥横穴墓群】

土肥横穴墓群は、標高67～72.5m付近に9基の横穴墓が分布している。1～6号墓までは、一つのグループとして認められ、7号墓と8号墓と9号墓は単独に分布する。中でも特徴ある横穴墓としては、2号墓の鴨居形天井を呈するもの、6号墓の玄室右に一段高く屍床を有し、天井が平形を呈するもの、7号墓の玄室床に排水溝を設けているものが挙げられる。

これまでの調査例から天井形態を比較していくと、2号墓の鴨居形天井は、飛山横穴墓群4号・23号墓を含めて4基、大曾横穴墓群8号墓、下郡横穴墓群13号墓の6基にすぎず少ない。平形天井にいたっては、屋宗横穴墓群3号・4号墓、穴蟹喰横穴墓群10号墓を含め2基の計4基しかない。7号墓の排水溝は玄室の壁の周囲と中央にある構造であるが、これと類似する例として、飛山横穴墓群の5例しか見あたらない。

このように、この支群は天井構造に特徴を持ち、しかも類例の少ないものばかりである点が注目される。造営時期については、古いタイプの寄棟形天井がないことやアーチ形天井が崩れたドーム形天井が少ないことから造営の時期の中心は7世紀初頭から前半代におさまるものと考えられる。



第8図 土肥横穴墓群俯瞰図

志土地横穴墓群

横穴墓番号	玄室の形態	天井の形	備 考
1号墓	方形	アーチ形	
2号墓	隅丸方形	ドーム形	
3号墓	隅丸方形	ドーム形	
4号墓	隅丸方形	ドーム形	
5号墓	隅丸方形	ドーム形	
6号墓	方形	ドーム形	
7号墓	方形	ドーム形	天井がやや高い
8号墓	方形	ドーム形	天井がやや高い
9号墓	不明	不明	羨道に土砂が流入
10号墓	不明	不明	羨道に土砂が流入
11号墓	不明	ドーム形	

木ノ上峠横穴墓群

横穴墓番号	玄室の形態	天井の形	備 考
1号墓	不明	不明	羨道に土砂が流入
2号墓	不明	不明	羨道に土砂が流入
3号墓	不明	不明	羨道に土砂が流入
4号墓	不明	不明	羨道に土砂が流入
5号墓	方形	アーチ形	前庭部に蓋石が残る
6号墓	方形	寄棟形	コの字形屍床
7号墓	逆台形	アーチ形	コの字形屍死、蓋石有り
8号墓	妻入り楕円形	アーチ形	

土肥横穴墓群

横穴墓番号	玄室の形態	天井の形	備 考
1号墓	隅丸方形	ドーム形	
2号墓	方形	鴨居形	玄室周囲に排水溝有り
3号墓	不明	不明	羨道に土砂が流入
4号墓	妻入り楕円形	ドーム形	奥に行くほど玄室が狭い
5号墓	隅丸方形	アーチ形	
6号墓	方形	箱形(平天井)	右側に屍床有り
7号墓	方形	箱形(平天井)	中央と周囲に排水溝有り
8号墓	不整隅丸方形	アーチ形	
9号墓	方形	寄棟形	二次の使用有り

2. 山伏古墳群

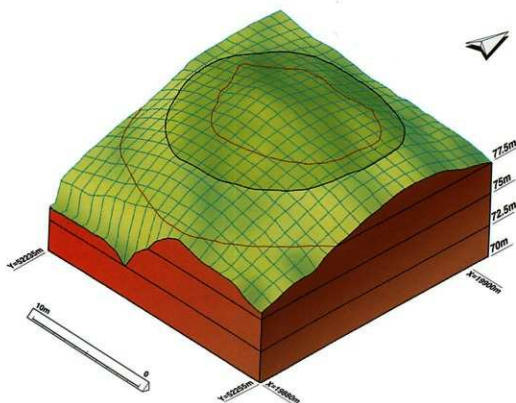
山伏古墳群は、標高80～88mの東西に延びた山の尾根に位置する。古墳は、過去に分布調査をおこなったときには、阿部古墳・四本松古墳・山伏古墳の3基の古墳が周知されていた。今回、地形図の作成と共に現地踏査の結果、古墳と推測されるものを含めて7基が確認された。東側の1号墳から西側の7号墳にかけて連続して連なり、7号墳のみが谷を挟んで突出した尾根の頂上に位置している。5号墓は、方形墳であるがそれ以外の6基の古墳は円墳と推測される。

【1号墳】(阿部古墳)

1号墳は古墳群の最東端の標高72mに位置する。古墳は、今回測量調査をおこなった範囲外に位置しているため規模は不明であるが、現地踏査の結果、円墳であることが確かめられた。

【2号墳】

2号墳は古墳群の東側の標高80mに位置する。規模は、直径15m、高さ1.2～2.7mを有する円墳である。山伏古墳群の中で最も規模が大きい。北側には、里道が走っており、墳丘の裾を削っている。墳頂部は保存状態が良く、主体部が残っているものと思われる。



第9図 山伏古墳群2号墳俯瞰図

【3号墳】

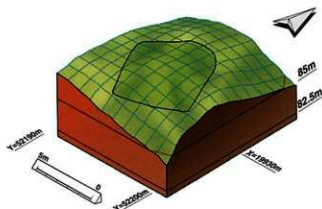
3号墳は標高82mの尾根上の斜面にあり、規模を想定すれば直径6.4m、高さ0.9mの小規模な円墳である。尾根の地形を利用しており、尾根の両斜面と古墳との境が不明瞭である。墳頂の中心には20cmほどの窪地が見られ、盗掘坑の可能性もある。

【4号墳】

4号墳は標高83mの尾根上にあり、3号墳がすぐその東側に連なって見られる。地形の状況から直径5～6m、高さ0.5～1mの規模の円墳と思われる。

【5号墳】

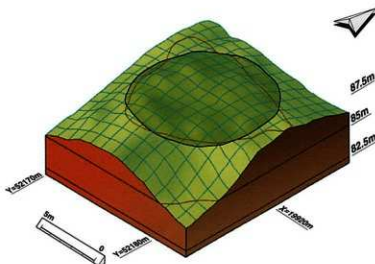
5号墳は標高87mの山頂付近にあり、そのすぐ南斜面下には木ノ上峠横穴墓群の5～8号墓が分布している。この古墳は一辺6m、高さ0.5～1mの規模の方形墳であった。市内では、小牧山古墳群で確認されたものに続いて2カ所目であり、大変類例が少ない。



第10図 山伏古墳群5号墳俯瞰図

【6号墳】（四本松古墳）

6号墳は標高87mの5号墳と並んで山頂に位置している。直径10m、高さ1～1.5mの規模を有する円墳である。北側には里道が走っており、古墳の裾を少し削っている。中央には、20cmの窪地が見られた。南側斜面下には、木ノ上峠横穴墓群の1～4号墓が分布している。



第11図 山伏古墳群6号墳俯瞰図

【7号墳】（山伏古墳）

7号墳は、1～6号墳から70m西側の尾根上に孤立して位置する。南側斜面には、大きな削りが見られ地形に大きな乱れが見られる。この部分の地質が横穴墓を掘削するのに最適な凝灰岩であることからいつの時代か、この場所から凝灰岩を切り出した石切場ではないかと思われる。なお、現地の状況から円墳と思われるが、地形的に不自然な点があり、今後詳細な調査が必要になろう。

3. 浅草神社古墳群

浅草神社古墳群は、標高43～50mの丘陵上に計10基の古墳が分布している。古墳の分布する丘陵は、平坦になっており、古墳の造営時に整地をおこなったものと考えられる。現在、丘陵の中心地には浅草神社の社が奉られているが、この境内は、さらに整地をおこなった様子がうかがえる。

古墳の墳形は、北側半分に位置する8基の古墳は円墳であるが、南側の2基は方墳になると思われる。

【1号墳】

1号墳は、標高43mの丘陵端部に位置する。古墳は直径10mの円墳で周囲には馬蹄状の幅3mの浅い周溝が見られる。箱式石棺の主体部が露出しており、長さ1.7m、幅0.7mの大きさを有する。墳丘の高さは、高低差のある部分で1.3mを有する。主体部のすぐ西には鳥居と参道が走っており、墳丘がかなり削平されている状況である。

【2号墳】

2号墳は、1号墳のすぐ西側の標高45mの丘陵の端に位置し、周溝部分は重なりあっている。規模は、直径10m、周溝の幅は3mを有し、北側の墳丘の裾は斜面を利用している。墳丘の高さは、低い所で0.5m、高い所で1mを有する。

【3号墳】

3号墳は標高46mの平らな場所に立地している。古墳は、直径14mの円墳で周囲には馬蹄状の幅3.5mの周溝が巡っている。墳丘の高さは1.2～1.3mを有する。墳丘の北西側には、削平された痕跡がうかがわれる。

【4号墳】

4号墳は、標高47mの丘陵の中央よりに位置している。古墳は、直径11mの円墳で周囲には幅4mの周溝が巡っている。墳丘の高さは、1mを有する。墳丘の保存状態はよい。

【5号墳】

5号墳は、標高46mの平らな場所に立地している。古墳は、直径13mの円墳で、周囲には幅3mの周溝が巡っている。墳丘の高さは、低い所で0.6m、高い所で1.1mを有する。墳丘部分は盗掘による掘り込みが見られる。

【6号墳】

6号墳は、5号墳と丘陵の端に挟まれた標高46mの所に立地している。古墳は直径8mの円墳でその周囲には馬蹄状よりやや広がった幅2～5mの周溝が見られる。墳丘の高さは0.3～0.6mと非常に低い。

【7号墳】

7号墳は、標高46mの墳丘の端に接して立地している。古墳の規模は直径18mを有し、群中で最も規模の大きい円墳である。周囲には馬蹄状に幅5mの周溝が見られる。墳丘の高さは、1.5～2.2mもあり、保存状態も大変よい。

【8号墳】

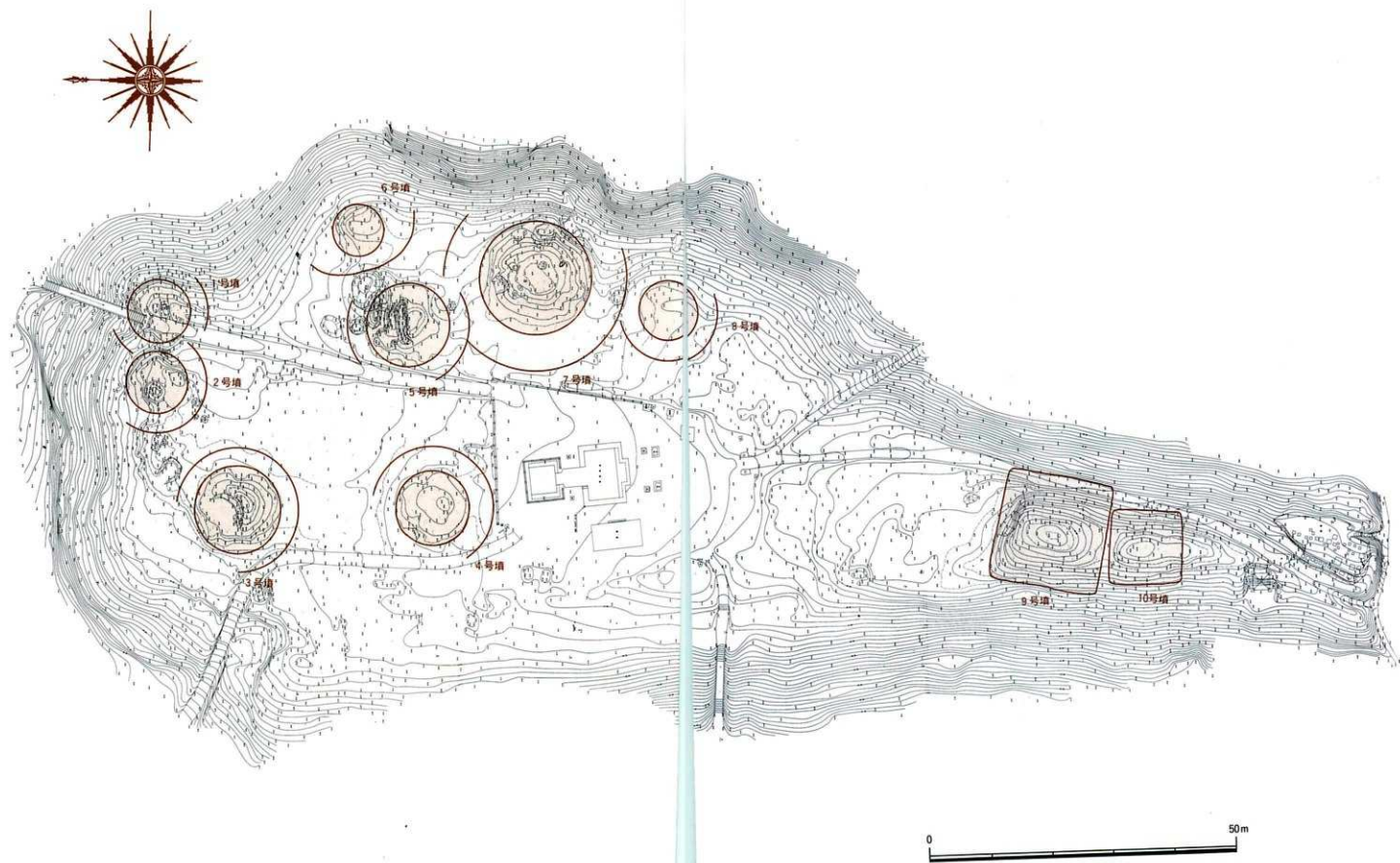
8号墳は北側にある7号墳と接した標高47mの場所に位置する。古墳は直径10mの円墳で、周囲には馬蹄状の幅3mの周溝が見られる。墳丘の高さは0.5mしかなく、削平されたものと考えられる。

【9号墳】

9号墳は1号～8号墳から南に50m以上離れた場所にあり、標高49mに位置する。古墳は一辺18m、高さ3.4mの方墳と思われるが、これほど大きな方墳は市内初である。ただし、10号墳と接していることからこの9号墳と10号墳が一つの古墳となる可能性もあり、これについてはトレンチ調査などの確認が必要であろう。

【10号墳】

10号墳は9号墳と接した標高50mに位置する。古墳は一辺12m、高さ1.7mの方墳と考えられるが、墳形については、同じく今後の調査が必要であろう。



第12図 浅草神社古墳群地形図

Ⅲ. まとめ

木ノ上地区は、周囲の住宅開発増加に伴って大きく変貌しようとしている地域であるため、これまでも埋蔵文化財が重大な危機にあっており、特に昭和43年には住宅造成工事のため、七瀬川流域で最大の全長75m、後円部高9m、前方部高6mの規模をもつ前方後円墳である御陵古墳が消滅する運命となった。

この様な、過去の犠牲を踏まえて平成6年度、平成7年度の2ケ年に渡って木ノ上地区重要遺跡確認調査を特に古墳を中心に詳細な地形図化により遺跡の規模や範囲、未発見の古墳等を把握してきた。

この地区は、5世紀中頃の主軸に直交して大小二基の箱式石棺を有する御陵古墳を盟主として仰ぐ古墳群やその後に続く横穴墓群が存在している。

まず、御陵古墳の南側100mのところに浅草神社があり、この境内に円墳の盛土がいくつも見られる。これが浅草神社古墳群としてこれまで円墳7基が存在していると周知されていた。

今回の調査で丘陵上に10基の古墳が分布していることが判明した。北側には、8基の円墳があり、すべて直径10mを越える大型の墳丘で周溝を有している。南側の2基（9号・10号）については今回の調査で方墳であることが分かった。9号墳が一辺18m、10号墳が一辺12mで連続的に造営されており類似する例としては、大野川流域にある大分市松岡地区の小牧山古墳群であり、大変注目される資料である。

現在、東参道鳥居の脇に全長1.7m、幅0.7mで凝灰岩製の石棺（1号墳）が露出している。石棺からは成人骨片、鉄器片、土師器片が発見されたと口伝されており、御陵古墳の年代に近いものであろうとされている。おそらくすべての主体部は箱式石棺であったと考えられる。

また、同じ様に古墳の群集する場所が西北約500m離れた丘陵上に山伏古墳群がある。これまで阿部古墳・四本松古墳・山伏古墳の3基が知られていたが、今回の調査で7基存在することが確認された。

この古墳群についても浅草神社古墳群と同様に5世紀代に造営された御陵古墳を盟主と仰ぐ有力豪族集団、いわゆる小首長の墳墓であろう。七瀬川流域では6世紀以降には石室をもつ古墳は造られなくなり、大分川・賀来川流域に支配勢力が移ることになる。

しかし、その後も有力家族の集団墓として横穴墓が造られるようになる。特に木ノ上では山伏古墳群が存在している丘陵斜面の谷に面した東側（上肥横穴墓群）・北側（木ノ上峠横穴墓群）・西側（志土地横穴墓群）の各場所に3支群28基の横穴墓群が分布している。

この横穴墓群の造営年代は、木ノ上峠横穴墓群から見ても6世紀後半には造営が開始されていることは間違いないと思われる。特に注目すべきものとしては、5号・7号墓の羨門入口に閉塞するための石蓋であり中央部には短冊形の浮き彫りの陽刻を施している。この意味は、本来、木製扉板に付けられる門を架ける突起を表現したものであろうとされている。

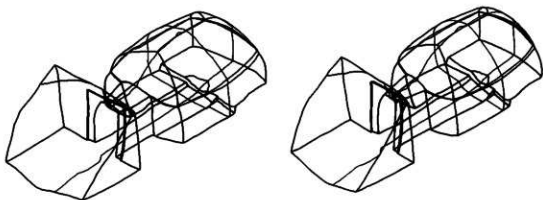
九州で6世紀代の熊本県多良木町赤坂古墳の横穴式石室で使用されている報告があるため、このような閉塞石をもつ横穴墓は、肥後ルートによるものか人の移動によるものかであろうか。このような構造をもつ石蓋は石室で数例見られる以外横穴墓では例を見ないものである。また横穴墓の玄室内のコの字形屍床の祖形が6世紀代に流行する肥後型石室墳の屍床の形態の流れをくむものであり大変注目される。

以上のように今回の調査で木ノ上地区の古墳群、横穴墓群の正確な位置、古墳の規模や数の把握、未発見の古墳等の確認ができた。この地区は七瀬川流域を中心に栄えて発展してきた所であり、古代で重要な場所であったことが古墳の数からうかがえる。さらに横穴墓の構造や施設からこの場所が肥後からの文化の交流するルート上に位置していることも示唆されよう。

フリガナ	キノウエカキ ジムウダウ イセキ カブシンチノウキホウコラシ	
書名	木ノ上地区重要遺跡確認調査報告書	
副書名	木ノ上峠横穴墓群／山伏古墳群／浅草神社古墳群	
巻次	-	
シリーズ名	-	
シリーズ番号	-	
編著者名	讃岐和夫・塔鼻光司・坪根伸也・池邊千太郎	
編集機関	大分県大分市教育委員会	
所在地	大分県大分市荷揚町2-31 (〒870)	
発行年月日	西暦1996年3月29日	

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
キノウエトウ 木ノ上峠 横穴墓群	キノウエ 大分県大分市大字 木ノ上	大 分	099 100 101	33° 10' 41"	131° 33' 36"	199404) 199503	16,000㎡	重要遺跡 確認にお ける調査
ヤマブキ 山伏古墳群	キノウエ・タハラ 木ノ上・田原	大 分	098	33° 10' 41"	131° 33' 36"	199404) 199503		
アサクラジシヤ 浅草神社 古墳群	キノウエ・クサド 木ノ上・口戸	大 分	105	33° 10' 24"	131° 34' 00"	199504) 199603	14,000㎡	

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
木ノ上峠 横穴墓群	横穴墓	古 墳	横穴墓 28基		
山伏古墳群	古 墳	古 墳	円墳 6基 方形墳 1基		
浅草神社 古墳群	古 墳	古 墳	円墳 8基 方墳 2基		



立体透視図

立体透視図によって立体視できます。

(左の図は左の眼に、右の図は右の眼に見える
ようにすると図が立体的に見えます。)

木ノ上地区重要遺跡確認調査報告書

平成8年3月29日

発行 大分市教育委員会
大分市荷揚町2-31
印刷 いづみ印刷株式会社
大分市大字下郡字丁畑3119-1



文化財登録シンボルマーク

ひるげと開手のひらのパターンによって、四季雑草の豊かな景観である林間（まきぐみ）邸をイメージとし、これを広げ繋げることによって、文化財という芸術の遺産を過去、現在、未来にわたり永遠に伝承していくという愛蔵精神を象徴したものです。

（昭和31年11月20日指定）